

第12回「日本語大賞」

テーマ「私を動かした言葉」

一般の部 優秀賞 受賞作品

「教師」

埼玉県
松下 喜彦

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

一浪してやっと入った大学は第二志望だった。その大学の法学部は定評があつて、周囲から「おめでとう」と口々にお祝いの言葉をかけてもらった。けれども、嬉しくなかった。そもそも滑り止めで受験した大学だった。そこに行くために一浪したのではないというつまらない自負があつた。それに法律関係の仕事に就く将来の自分の姿というものが、全く想像できなかつた。今から思えばつまらない矜持である。でも、当時の若い僕はその感情を持って余し、ついには大学の授業に出なくなつた。そして、自分の部屋に閉じこもるようになった。逃避だ。

家の二階には一室しかなかった。それが僕の部屋だつた。鍵のかからない襖の部屋である。そこで、雨戸を締め切り真つ暗にして、朝から晩まで布団をかぶつて過ごした。何もやる気がしなかつた。最初は「何をやっているのか」と古責していた父も、そしてもつとやんわりと僕を否定していた母も、一週間もすると何も言わなくなつた。食事は朝、昼、夕と、母が襖の外に置いておいてくれたが、食べることもあれば食べないこともあり、全く食べない日もあつた。トイレはどういう訳か昼間は催すことがなかつた。専ら、家族が寝静まつている夜に用を足した。

親戚が心配して、おじやおば、それに年長の従弟たちが入れ替わり立ち替わり、僕を部屋から出そうとやつて来ては、何やら話して帰つて行つた。そういう話も全く耳に入らない。僕の頭の中は自省の念で一杯だつた。どうして第一志望に入れなかつたのだろう、どうして第二志望にさえ受からなかつたのだろう。どうして、せつかく入学した第三志望の大学に行かなくなつてしまつたのだろう。

大学を受験するには当時も数万円を要した。そして、大学の入学金は相当な金額であつた。それは、全て父親が働いてこつこつ貯めてくれたお金だ。このままこの部屋から一生出られないかもしれない。そうなれば、それらのお金は全て水泡に帰してしまふ。自分は何と馬鹿なんだろう。自分は何と阿呆なんだろう。そんなことを繰り返し繰り返し考えていた。外に出て、もう一度大学に行こうという気持ちは、それでも毛頭なかつたことが、さらに自分自身を苦しめた。

夜、父親は寝る前に、僕の枕元に毎晩来て何か話してくれたが、僕は布団をかぶつたまま、耳を塞いでいた。ある日のことだ。その言葉がどういふ訳か耳に届いた。

「何になりたい？ もしも君になりたいものがあるなら、そのために今の大学が必要ないなら、大学、辞めてもいいんじゃないか」

それは意想外の言葉だつた。

大金を支払つたのだから、大学に行くことから逃げてはいけないと思ひ込んでいたが、父親は辞めてもよいと言う。そういう選択肢も有り得るのか。そう考えると、心が軽くなつた気がした。

ところが、考えても考えても、自分が何になりたいのかが見えてこない。第一志望も第二志望も文学部だつた。小説や古典が大好きだつた。それらの勉強をしたいとは思ふが、その果てに何になりたのかと問われれば答えが見つからない。

翌日の夜だつた。いつものように父親が僕の枕元でぼそりぼそりと話し出した。自分の青春時代は戦争オンリーだつたこと、軍隊に入隊し、訓練に明け暮れ、しよつちゆう上官に殴られていたこと、戦場に送り込まれ頭がおかしくなりそうだつたこと、そして、戦争が終わつてから親友が「お前は手先が器用だから散髪屋なんて向いているんじゃないか」と言ってくれたこと、そんな話だつた。

だから、父親は今、理髪店を経営していたのだ。それは、全く知らない父親だつた。

そして、父親は続けた。

「君は教師に向いていると思う。中学時代、よく友だちがうちに勉強を教えてもらいに来ていたじゃない。そばで聞いていて、うまい教え方だなあと考えたものだよ。君の人生だからね、最後に決めるのは自分しかないよ」

「教師に向いている」というこの言葉は、僕の心の奥底に沈着した。父が部屋を出て行つてから、思い出し出していた。

中学生だった自分を。クラスメートがよく確かに訪ねて来た。数学や英語は先生に聞くより僕に聞いた方が分かりやすいという言葉に乗せられて、応接室で勉強を教えていたものだ。あれは楽しかった。僕自身が頭の悪さを自覚しているので、どこがどう友だちが分からないで悩んでいるのか、手に取るように分かった。

そして、教壇に立ち、子供たちに勉強を教えている自分の姿が目に見えた。

翌朝、僕はすがすがしい気分の朝を迎えた。顔を洗い、歯を磨き、まだ腕を通していなかった新しい服を着こんだ。そして、起きて来た父と母に宣言した。

「今の大学を辞めてリセットさせて下さい。僕は教師になる道を歩きます。そのわがままを許して下さい」

あれから、四十年近くが過ぎた。父母に宣言した翌年、大学に入り直し、大学では教員免状を取得し卒業した。しかしながら、僕は学校の教師にはならず、塾を経営することになった。大学二年からアルバイトで家庭教師をしていた子どもたちが、「大学を卒業しても僕たちを見捨てないでよ」と訴えてくれたからだ。勉強を教えるのは実に楽しい。あの時の決意のままに、僕は今、子どもたちに勉強を教えている。

父は二十年前に他界した。母も去年、逝った。両親のお蔭で今がある。「教師に向いている」という父の言葉を胸に置いて、その言葉を今日も信じて教壇に立っている。